

附
録

外人の問に答へたる神道

大正元年

宮地 巖 夫 述

古き外人
の觀たる
日本國民性

大正十年

蜷 川 新 譯

宮地蔵夫（弘化四年—大正七年、一八四七—一九一八）

高知城下、手嶋増奥の三男。幼名竹馬、後蔵夫と改名。城内八幡宮祠官宮地重岑に皇典を学び見込まれて養嗣子となる。明治三年高知藩出任、異宗者説掛となる。四年社寺係諭俗拝命兼大高阪藤並大明神祠官拝命、ついで皇大神宮権禰宜、枚岡神社小宮司、豊受大神宮禰宜。十年教導職に専念し敬神・尊皇思想の普及に努む。二十一年宮内省掌典。四十一年楽部長。大正二年より大礼使事務官典儀部勤務。この頃高等官三等、敍正五位勲四等。七年歿。敍從四位勲三等。日本国家学談・神道・神仙記伝・君子不死国考・世界太古等の主著あり。

蠅川新（エカハアヲタ明治六年—？、一八七三—？）

静岡県興津の隣村袖師ソヅシに生る。嬰兒のまま生母と共に東京神田明神下の母の実父の家にて生長。海軍兵学校に志したが体格で失格。明治二十二年第一高等学校入学。外交官を志す。卒業し、一年志願兵となり一年三ヶ月勤めて、東京大学法律科入学。仏語・国際法を修得。大蔵省及第せしも辞し読売新聞社入社。後に電報新聞に転ず。当時日露間風雲急。七博士の開戦に賛成。予備少尉として参戦し国際法の知識を生かす。ポーツマス条約を有利に導く。四十三年韓国政府の官吏として肅正。大正元年法学博士。二年より三年まで欧州旅行。三年末同志社大学教授として三年奉職。七年日本赤十字社慰問使として再度欧州。八年パリで公式に赤十字社聯盟の成立に成功。一旦帰国し再度渡欧九年帰朝。後、シナ・満州・シヤム等歴訪。十一年ワシントン軍縮会議に出席。アメリカ政府の対日方策批判糾弾。十一年以降、マルクス流インテリナショナルを批判し全国講演。昭和八年国際聯盟脱退以降、脱退に反対したが周囲の勧告に従って沈黙。戦後追放された。著書多数。本稿は『天皇』（昭和二十七年）所収「私の歩んだ道」による。

追記 二書共に表紙及見出しは旧漢字、文中は新漢字に改む。

宮地巖夫先生講話

外人の問に答へたる神道

外人の問に答へたる神道の序

本書は宮地大人か或会のために明治四十一年九月廿九日華族会館に於てせられたる講話の筆記なり実猛曾て之れを読めるに唯一席の口演に過されとも能く我大道の至要を簡約に述へ尽して余蘊無きに至らしめられたるは偏に感佩するの外無し然るに近世東洋の各国泰西の文化に圧倒せられて殆んど国を為すこと能はざるもの比々皆然らざるは無き中に於て特り我帝国か屹然として勃興し明治維新以来僅々四十有余年にたに過ぎざるに世界強国の班に列し宇内の人をして喫驚せしめ其何の爲めに然るかを疑はしむる一問題となりしも此の講話に於て立どころに氷解

せしむべきは実に愉快の極にあらずや而して此問題たる唯外人か解決に困む而已にあらず我同胞と雖も亦自ら釈然たること能はざるもの或は少数にあらざるべきか若し然らむには之れを公にし世人をして普く読むに便ならしめむことを計るは蓋急務中の急務と云ふへし実猛遂に黙すること能はず以上の理由を述へて大人に乞ふ大人固より吝ならず快然として許諾せらる是に於てや即ち印刷に附して愛国同志の諸君に頒たむとす希くは諸君も亦此の意を諒とせられ之れか普及を計られむことを爰に聊か事の始末を書し以て之れか序となす

大正元年十一月十日

井澤實猛

外人の間に答へたる神道

門人等筆記

宮地殿夫先生講話

本日は何か御話申上るやうにとの事にて、参上致しましたが、此れと申て別に御話申す程の事も御座いませぬど、先般私が実歴致しました事に就き外人の問ひに答へたる神道と申す題を設け、此題に因て御話申す事に致しませう、扱其御話の順序として、先外人の問ひを受けるやうに成た次第より御話致します。夫れは本年六月の事で御座いましたが、高崎御歌所長より、此両三日前英国の人にて、ゴルドンと云ふ夫人が、通弁を連れて自邸へ参りて申すには、自分は昨年九月より、貴国へ参りて居る者で有ります。其自分が貴国へ参りた訳は、先年貴国と清国とが開戦せられた時、歐洲人一般の考へには、版図の上から見ても、人口の上から見ても、貴国よりは清国は、殆と十倍以上の大國なれば、結局貴国の不利に帰す

る事の有りと、御氣の毒に思はぬ者は無りしに、事實は予想に反し、来る報も来る報も、皆貴国の連戦連勝にて、意外にも貴国の大勝利に終りたるは、全く世界の各國を喫驚おどろかされました。就ては此日本の大勝利は、当時欧米各國にての一問題と成りて、研究致しましたが、此日本の勝利は、実は日本の勝利に非ずして矢張歐洲文明の勝利である。其故は清國は大國なるには違ひ無れど、人物が遅鈍にして、歐洲の文明を取る事が充分に出来ぬに反し、日本人は機敏にして、歐洲の文明の利器は勿論、海陸の軍法戦術より、制度文物総て之れを歐洲に採て、今日にては、純然たる東洋の文明國と成たるに依り、今回の勝利は得たるなれば、日本が勝たでは無い、矢張歐洲の文明の勝利に帰するで有ると申すことに成て、其解決が付て居りました。然るに其れより十年立つか立ぬかの間に、貴國がまた露國と開戦せらるゝと聞し時は、露國は世界に知られたる大強國にて、歐洲の各強國と云へども、孰れも之れと事を生ずるは、其國の不利なりとして、成る限り避ざるもの無き程の國なれば、如何に貴國が俄かに

強國と成りたればとて、露國を敵とするは、行がよりの上、実に止を得ざるに出たる事でも有りませうが、必定御氣の毒の始末を、見るに至るで有らうと、思はぬものは無きことで有りました。然るに此れも亦事實は予想に反して、全く貴國の勝利に帰しりました。是に於て歐洲にては貴國の眞実に強きことが、又々一つの研究問題と成て、種々に竅査する事と成りました。中には、貴國の方々に就て問ひ質したる人も有つた様子にて、其答が追々に分つて來ました所が、日本には武士道と云ふものが有つて、其れで國が強ひと申す事にて、其武士道に就ての著書が多く出來て、英訳にも成て參りましたから、多くの人が之を読んで、中には成程然う云う訳でも有うと得心したるものも有りましたらうが、私は如何に考へて見ても、其武士道と云ふものは、唯日本の特有ばかりで無くて、世界の列強と稱せらるゝ程の國にて、武士道を以て立つて居らぬ國は有りませぬから、日本の強きは、唯此の武士道ばかりでは有るまい、此の以上に於て、何か別に大きに強き所以が有うと考へますより、能々聞て見

ますと、果して日本には神道と云ふ、極めて完全なる一種の宗教が固より有りて、其宗教に依て強きで有る、武士道と指すものは其神道中の一部の名で有ると云ふことですから、此れは大ひに研究すべき価値の有るものと思ひますより、奮発して貴國へ渡來致しました。所で神道と申すからは、先神社に就て調査すれば、早く分るで有うと思ひまして、所々の神社を訪ひて、精細に取調べて見ましたれど、此れが完全なる宗教の神道で有うと認むべき要領を得る事が出来ませぬ。其他種々の方面に向ひて問ひ試みて見ましたれど、何れの方面にても、其神道の所在を聞くことが出来ませぬで、甚だ遺憾なる月日を送りました。然るに此頃不図感ずる所が御座まして、貴官は御歌所長で在せらるゝに依て、今日は參上致しました、(と申すは、日本にての歌は、西洋の謂ゆる詩で有りませんが、西洋にては詩人は在ゆる一切の學問に精通した人で無れば、詩人とは成ることが出来ぬものと成りて居るそうで有ります。ソコデ、ゴルドン夫人も、高崎男爵は日本の詩人にて、特に聖上陛下の御詩を拝見する方で有

らるゝから、必ず在ゆる万の学問にも精通して居らるゝに違ひ無き訳で有る。然れば同男爵に尋ねさへすれば、神道のことも解るで有うと、考へを付けたものと見えます。何卒此旨を御承知の上、神道と申すものゝ大要を、御聞せに預りたいとの相談を受けましたが、此れが我国体の事とか、倭魂やまとたましひの事とか云ふ問ひならば、自分で直ちに答へも致さうと思ひましたが、何分にも其問題が殊更に神道と申すで有る而已のみならず、西洋から態々研究に來たと云ふ所から考へて見ても、其答へは夫人必ず筆記して、本国へ報告もするで有うし、また自分の著書に載するで有う。然する時には、西洋の雜誌にもまた新聞にも載せらるゝかも知れぬ訳ですから、余り無責任なる答はして置れぬは申すまでも無きを以て、自分は即答を為さず、此の神道の事に就ては、専門に調べて居る人が有るから、其人を紹介致さうと申して、其日は返へし置ました。就ては甚御苦勞の儀なれど、差支の無き日を以て、自邸へ彼夫人を招くにより、出会して神道の事を御話に預り度との事に就き、私は外国の人が我道の研究に來る

とは、誠に結構なる事なれば、私の話にて其夫人に分るか分らぬかは、知れませぬど、兎に角に出会して、話す事に致しませうとの、御約束を致しました。すると六月の第二の日曜で有つたかと覚えて居りますが、高崎殿から、其日の午後一時に参る様にと申し越れたるに因り、其時刻に参りましたれば、ゴルドン夫人は、通弁の人を連れて来て居りました。ソコデ、初対面の挨拶が済ますと、夫人は通弁を以て前日高崎男爵へ申述べた通りを、繰返して之れを述べ、今日は当家御主人の御紹介に因て御面会致し、神道の御話を承る事を得るは本懐の至り有りませぬ。此れより何卒其御話を聴聞致したしと申しませぬから、私は之れに答へて、夫人が遙々我国へ渡來せられて、神道の所在を御探しに成りたれど更に要領が得られない。其所在が分ら無いと申さるゝは、至極尤の事である。夫は何故かと申すに、実は我日本の全体の組織が、即ち神道で成て居る国で有りますから、其中へ御出に成て、何処に神道が存るで有らうと申すやうに、御尋に成りては、到底分りませぬ。ソコデ、其神道を精細に御話

申さんには、神道に伝へたる天地開闢の古説より、此国土の成立し来れる所謂建国の歴史を、逐一に御話申さねば分りませぬに因て、夫は容易ならぬ事業にて、とま逆も一席や二席にて、申し尽さるゝ訳のもので有りませぬ。就ては夫人には、昨年九月以来、我国へ御出に成て、百方調べて見られたと申ことで有りますれば、我國の事に就て、多少質問を要せらるべき事が有うと思はれます。若し然らば其問を起さるれば、其問に依て御答申さは、余程御解りに成易くして、便利で有うと思ひます。夫とも唯神道の要点、所謂眼目と言ふべき所を、一席の談話にて述べらるゝ限りの御話にても、宜しいと申す儀なれば夫れも亦成ぬ事では有ませぬから、孰れに成りとも、御望次第に御話する事に致しませうと申しましたれば、夫人は暫く考へて質問致し度ことも数々有りますれど、先其神道の要点、一席にて述べらるゝ丈の事を、御聞せに預り度と申すことに成しました。ソコデ、私が然らば此れより、神道要点の御話を致します。先此の神道と申すは、支那字の音にて、此二字を我国にては、カミのミチ

と訓みます。抑カミのミチと申すは、カミの自然かみながらたてに立させられたミチと申す訳で有りますから、此御話を致すには、兎にも角にも先神の事より説き明さねばなりません。扱其神の事で有りますが、基督教国にて、尊ぶ所の神は、特とま一神と申して、神は御一方に限りて、其外に神は無きと申す事に成て居ります。我神道の神は此れと聊か其説が違て居ります。神道の神には、主宰の神と、分掌の神とが有りまして主宰の神の上より申さば、一神で有りますれど、分掌の神の上より申す時は、八百や万よろづの神と申して、頗る多くの神が有ります。之れを総合して申さば、一神にして多神、多神にして一神と申す訳にて、例へば此現世に於て、一君主にして億兆の臣民を統轄し、億兆の臣民にして、一君主を奉戴して居ると、其道理に於て少しも違ひの無き、実に秩序の整然たる神で有ります。ソコデ、神の説明とましを致すとしても、分掌の神の事まで御話致しては、逆も時間が許しませぬから、其神の道を立られた、主宰の神の事を、簡単に申す事に致しませう。扱其主宰の神は、一神で有りますれ

ど、又其神徳が分れて三神と成て在せられます。故に之れを造化の三神と申します。先其主宰の神の御名は、第一に天之御中主神と称し上ます。此の御名の意義は、天の真中の主の神と申す訳にて、此宇宙の中心に御座なされて、宇宙の全体を統轄し在せらるゝ神と申すの意であります。次に高皇産靈神、神皇産靈神と申し上る、御二方の神が在せられます。扱此神の御名の意義は、高皇産靈神の高は、健く高く進み行く皇産靈神と申す訳にて、此れは其宇宙の中心力と座ます。天の真中の主の神より宇宙の外面に向ひて遠く放れ健く高く進みて、膨脹する神徳が有る。其神徳を主る神で在せらるゝより、斯やうには称し上奉りしもので有ります。また神皇産靈神の神は、カミシメル皇産靈神と申す訳にて、此れはまた此の宇宙の外面より、其宇宙の中心力と座ます、天の真中の主の神を求めて、カミシマリ収縮し来る神徳が有る。其神徳を主る神で在せらるゝ故に、斯やうには称し上奉るであります。斯やうの訳にて、此の天地宇宙の間に、所

たり、求心たる靈徳の作用に因て、生々化々して尽ざる物と成て居りますより、世界の一切万物総て此靈徳に洩れたるものは有りませぬ。ソコデ彼の理学の原則の、中心力、遠心力、求心力と申すも、実は此の天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神の御三方の御靈徳が一切の事物に、具備して居らざるもの無きが真理の上に顕はれたるを、理学の原則とは申すと見えます。斯やうの訳柄でありますより、先天地世界の成立来りし事を、委しく説明さねば成りませぬど、前にも申した通り、夫は到底僅かなる時間に於て望むべからざる事でありますから、一切略しまして、右の御三方の神の御靈徳に因て、此天地世界の成ました上の事を、御話申す事に致します。扱此の国土の世界が、成ました所で、此れも矢張前の御三方の神の御靈徳を以て、伊弉諾尊、伊弉册尊と称す。陰陽御二方の神を生れ出させられました。此御二方が目に見ゆる身体と、目に見えぬ靈魂との二個のものにて成て居ります。人間万物の始祖の神で在せられます。ソコデ前に申ました、主宰の天神が此の陰陽御二方の神に、此の漂

蕩へる国を修理固成と申す、神勅即ち天命を御下し成されて、此の国土の世界へ御降しに成しました。是に於て、陰陽御二方の神は、此国土に御降成されて、自癡島と申す島を造りて、其島に御降着なされ、先八尋殿と申す御殿を御立なされて、御住なさるゝ事に成しました。其れは何故かと申せば、今も申した通り、抑も此の人間と申すものは、身体と靈魂との二個のものにて成て居りまして、其身体の爲には、住むべき家が無くしてはならず、衣るべき服が無くてはならず、喰ふべき食が無くてはならぬものと成て居ります。ソコデ、御二方の神も、先八尋殿と申す家を御造りなされて、御住なされたもので有ります。此れが人間の職業と云ふものゝ始まりにて、此の職業に依りて、世界が自然に開けて行くやうになりて居ります。夫はまた何故かと申すに、此世界の人間が、其身体の爲に、一日も無くて叶はぬ所より、食物を作りては農民となり、住家や衣服や其他の器物を造りては職工となります。ソコデ農民と成りたるものは、自ら作る食物は余れども器物が有りませぬ。また職工の方には、自ら

造る器物は余れども、食物が有りませぬ。是に於て互に交換して、余るものと足らざるものとを相補はねばなりませぬ所から、其農民と職工との中間に立て、雙方の余るものを買ひ来て、雙方の足らざる所へ売る、所謂商人と云ふものが出来ました。斯やうに致して、農工商の三民が出来ましたが、此れにては猶足りませぬ。何故かと申せば、其三民の世話を致して、各其職に安んじて、暮して行くことの成るやうにしてやる、所謂役人が無くしてはなりません。ソコデ此れも出来ました。此れを士と言います。爰に至て自然に、士、農、工、商の四民が出来まして、此の四民が孰れも、食はねばならぬ、衣ねばならぬ、住ねばならぬ、然も各成る限り、善き家に住たい、善き服が衣たい、善き食が喫たいと思ひて、其職業を勵みて働く所から、自然に山野が田畑と成り、其傍には、各種の人民か、打群れて住居を為すより、自然に村里が出来ます。此村と申す名も、其人民か群かりて住居する事実から起つた名であります。扱其村里か繁昌するに随ひ、物品の商売が盛になるより、軒を並べて市街と為り、

其市街の豎横十文字に、数を重ねて、瀾大に成りたる所を、都會とは申すで有ります。此れか前に申した人間万物の始祖たる、伊弉諾、伊弉冊、陰陽御二方の神か、宇宙主宰の天神より、御受なされた、此漂蕩る国を修理固成との神勅、即ち天命に御基きなされて、人間の身体に属たる道を御立なされ、此れに因て世界の開けて行くやうに、御定めなされしものであります。また其一方にて、陰陽御二方の神は、彼八尋殿にて、夫婦の道を御始に成ました。此れが人倫の道と申して、人類か互ひに交際をする始めにて、此れに因て世界が自然に治まりて行くやうに成て居ります。何故かと申すに、男女か夫婦と成ますれば、其間から子か生れて、父子の倫となり、また其子が先に生れ後に生れるに因て、兄弟の倫となり、猶其兄弟の子孫が、相ひ交際する所より、朋友の倫となり、斯やうに致して、自然に夫婦、父子、兄弟、朋友と申す、四の倫が定まりました、ソコで陰陽御二方の神は、何故に先夫婦の道を御始めなされて、此の四の倫を御定めなされたかと申さば、人の夫となりては、誠心を尽し

て我婦の為を思ひ、また人の婦となりては、此れも誠心を尽して、我夫の為を思ふ時は、夫と婦と其有形の身体は別なれども、無形の靈魂は結べて一つになる。此れを睦ぶと申します睦ぶとは矢張結ぶと同言にて、一つに成る意で有ります。また父と子との倫も父は子を思ひ子は父を思へば、此れも父子身体は別れても靈魂は睦びて一つとなる。斯やうに致して、兄となり弟となり、また朋友となりても、各誠心を尽して、互ひに為を相ひ思ふ時は、幾百万の多き人口となりても、皆睦びて一つになることが出来て、自然に家も齊ひ、国も治まりて行くで有ります。此の互ひに尽す誠心は、即ち目に見えぬ靈魂の活用の名で有りますから、此れも矢張陰陽御二方の神が、彼天神の此漂蕩る国を、修理固成せとの神勅即ち天命に御基きなされて、人間の靈魂に属たる道を御定めなされ、此れに因て国家の治まりて行やうに、立置せられしものであります。然れども此の四の倫のみにては、猶備はらざる所が有ります。其れはまた何故かと申さば、唯此の四の倫のみにては、此所にも夫婦、父子、兄弟、朋友

の倫に因て、交際りて居るものあり、彼所にも夫婦、父子、兄弟、朋友の倫に因て、交際りて居るものが有ると申すやうに成て、彼れ此れと相ひ隔り、離れ離れに成りて、統治オホセむることが成なまさぬ。ソコデ主宰の天神は、此の人倫の道を、全う備はりたるものに成させられんとして、彼伊弉諾、伊弉冊陰陽御二方の神の御子の中に特に勝れさせ給へる、皇祖天照大御神の御孫、皇孫瓊々杵尊と申し奉る御方を、天津日嗣の高御座と申し奉る、天子即ち君主の御位に御即けなされ、特に三種の神器と申し奉る、鏡と劔と玉との三種を、其御位の御璽ミシとして、御授けなされ、豊葦原瑞穗国トヨアシハラミズノクニと申す、此の天下の国土を、安国ヤスクニと平かに知宥しゆせとの神勅ありて、此世界に御天降しに成ました。此御方が我皇室の御大祖で在せられて、即ち天神の御手に代りて、此国土に君臨し給ふことと成ました。ソコデ、此の皇孫瓊々杵尊御以来の我皇室は、全く天神の御代表者と御成りなされて、天神の此国土を御愛念在せらるゝ神慮ミココロを御心となされ、民安かれ民安かれと、億兆の人民を愛撫して、仁政を施ほこさるゝを、愛国の政まつりごと

とは申すで有ります。また斯やうに仁愛の政を以て治めらるゝ、億兆の国民は其皇室を、全く天神の御代表者と信じ奉りて、相互ひに、夫婦、父子、兄弟、朋友の倫に随ひ、各道を相守りつゝ、天神を敬ひ奉ると同じ誠心を以て、尊び奉りますれば、皇室はまた億兆の国民の尊敬を御受なされ、今度は其億兆の国民に御代りなされて、天神を御崇敬在せられ、祭祀の礼を行はせらるゝを、敬神の祭とは申すで有ります。此れを解り易く申さば、我皇室は、天神と国民との中間に御立なされて、下に対ひては、天神に代り人民を愛撫して、政を施し、また上に対ひては人民に代り天神を崇敬して、祭を行ふが、即ち皇室の天職と成て居ります。此れを祭政一致の制とは申すで有ります。此の祭政一致の制を以て我皇室は、天下億兆の臣民を統御せらるゝことに成りました。故に天皇をスメラミコトと称し奉りますは、スベルミコトと申す義にて、億兆の臣民を統御オホセめらるゝが御名と成なしもので有ります。此れにて君臣の大義、上下の名分も定まりまして、前に申した四倫よつづついでに、此君臣の大倫を加へて、此に

始めて君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の五倫か、明白に具はりて、人倫の道か全きものとなりました。然るに、始め皇祖天照大御神か、皇孫瓊々杵尊に、三種の神器を御授けなされし時、御手に神鏡を御持なされ、此の鏡は専ら我御魂として、吾前を拝むか如く、齋き奉るべし。天津日嗣のさかえまさむこと、当に天壤と与に窮り無るべしと仰せられて、御授けに成りました。此れか天壤無窮の神勅と申すもので有ります。此の神勅空しからず、我皇室は、天神の御定めなされしより、幾千万年を経させられても、歴朝一系今古一日の如く、いつまでも御変り在せられぬ、天立の君主とは御成なされました。斯やうの訳にて日本国民は、建国の始めより、我皇室を以て、天神の御名代の神にて在せらるゝと信じ奉りて、毫しも疑ひませぬ故に、古来天皇を明神とも、顕人神とも称し奉り、歌などには天皇は神にし坐ばとも、誦で有ります。ソコデ、天皇の御命令即ち勅命は天神の御命令と、信じて居りますから、一度天皇より御命令か下りますれば、国民挙つて生命財産をも毫も顧みず、天皇の御為め、

国家の為には、忠義を尽すか、即ち日本国民の、本性と成て居ります。以上申し述べました所が、即ち神道の眼目専要の大略で有ります。ソコデ、先刻御話に成ました、日清戦争に於ても日露戦争に於ても、版図の上から言ひても、人口の上から言ひても、また海陸軍の設備の上から言ひても、数字の上から見ましては、逆も日本が勝る訳のもので無きやうでありますれど、事実に於て皆日本の大勝利に帰しましたは、第一我は正義の軍にして、天皇陛下の御聖徳と、海陸軍将校の忠勇画策の宜しかりし結果となりしには、違ひ有りませぬど、其手足と成て働く、兵士総ての強きは、全く此の神道の力によりたること、申すまでも有りませぬ。其れは何故かと申しますれば、先日清戦争の事から申しませうか。此れも先刻御話に成りました通り、我国か夙に東洋年来の旧習を一洗して、海陸軍の利器軍法戦術より、制度文物総て百般の事を、歐洲の文明より採て、大いに面目を改めたることは、事実にして、今更に申すまでも無きことで有りますか、此れも其百般のことを其儘に採た訳では有りませぬ。皆我国

の国体くにからだに合ふやうにして、採たもので有ります。今其一例を挙て申しますれば、我が代議政体を用ひて、国会を開設したことで有ります。他より見ますと、此れは専ら歐洲の制を其儘に移して用ひしものゝやうに思はれませうか。事實は決して、さうで有りませぬ。實は我國の上古猶神代と申した時代には、何か国家に大事件が起つた時には、必ず八百万の神等かみたちを、神集かむつどへに集へ神議かみはかりに議りと有りて、大いに會議を開きて、事を公議に決した事か、伝へに遺りて居ります。ソコデ、我國の国会は、此古代に有りし議會の事などを斟酌して、皇室に於て枢部の人々に諮詢ありて、憲法を欽定せられ、人民に参政の權を与へて国会を開設するには至つたもので有りますから、其憲法の發布の時などは皇室万歳の祝声全国に溢るる中に於て行はれました。孰れの国にても、憲法制定の時、君民上下の權利争ひにて、いつも血腥ちよんぐさき中に於て行はれて居りますに拘はらず、我國のは今申したやうに、万歳祝声の中に於て行はれましたは、大いに他の各國の国会と、性質の異なる所で有ります。然るに日本國

民は、元來國家に對し、皇室に對し忠實無二の國民でありますのみならず、神代には有りしとの事なれど、其以來絶て無りし参政の權を、此明治の御代に至て國民に与へられたものですから、議會に臨ては、決して遠慮会釈を致さずに、其赤心を吐露して各自が國家に對する所見を述ぶることに成ました。中には衷情の溢るゝ所、激烈に失して、或は我海軍は腐敗したりと論じ、或は陸軍に云々の弊害有りと絶叫する者など有りて、殆ど喧嘩の如く見えし事も無つたでは有りませぬ。ソコデ日本の真相を知らざる、外國の方より之れを見聞せられては、定めて日本には、政府と國民との間に、大衝突が起つて、内乱近きに在るものと、誤解せられたかも知れませぬ。中にも清國の政治家などは、最も甚しく我國を誤認して、此際このまゝに乗じ、東洋の覇權握るべし、亞細亞の牛耳執るべしとでも、思つたものと見えますして、我國との條約を無視して、俄に韓國へ兵を出すなど、無法を極めて我國を圧倒せんと致しました。然れども、事を好まざる我國は、最も温和に之れに接して、深切に回顧を促したれども、

更に其効無く、益横暴を極むるに至り、之れを放棄し置むには、遂に底止する所を知らざるを以て、我国も自衛の爲め、是非無く膺懲の軍を発せざるを得ざるに至り宣戦の詔勅を公布せられて、爰に開戦に成りました。すると内乱の萌有るかとまで見られたる、我国会は忽ち満場一致を以て、軍費の支出を可決し、其議會に於て腐敗したりと絶叫せられたる、我海軍は見るか内に、清国の北洋艦隊を殲滅に帰せしめ、陸軍は連戦連勝向ふ所前無く、殆ど清軍をして戦闘力無らしむる迄に至りました。夫は何故かと申すに、我軍人は前にも申した通り、皇室国家の爲には、更は一命を惜むものが有りませぬから死尽るまで一人も退く者が有りませぬ。ソコデいつも勝たぬことが有りませぬ。其故は曾て聞いたことが有りますか、彼の奈翁の格言に戦争の勝敗は終局の五分間に在り、其は我堪え難き時は、敵も堪え難き時なり、其堪え難きに至り、五分間を、辛抱して堪えなば必ず勝つと。然れば普通の戦争は、終局五分間を、堪ると堪ざるとに因て勝敗を決すると見えますに、日本軍は終局五分間を堪る位の

事では有りませぬ。仮令死尽るまでも、能堪えて戦ふ兵で有りますから、普通と違ひまするでいつでも連戦連勝で負ることが出来ませぬ。此れが比較的我国の少を以て、清国の多に打勝たる所以で有ります。また露国と戦ひて勝りましたが、此れと少しも違はぬ訳柄で有ります。其露国と戦はざるを得ざるに至た訳は、百も御承知と思ひますから、別に爰にては申し述べませぬ。実に当時露国は清国に代りて、我国に対し圧力を加へむとするごと、殆んど、横暴を極むるに至りました。是に於て、我国は自衛の爲めまたまた余義無く、露国に対し膺懲の軍を發せざるを得ざる事と成て、遂に亦宣戦の詔勅を公布せられました。所か我国民は其相手が清国で有ると、露国で有るとは更に拘はりませぬ。唯天皇の御命令と有らば、忽ち死を決して、国家保護の爲には、誠忠を尽すを以て、本分と致して居る臣民で有りますから、今日より見ますれば、云ふにも忍びざる悲惨を極めたことでもりまして、数十万の死傷は見ましたか、海軍も陸軍も、皆我国の全勝となりました。実は此の戦ひか、早く済ま

したから、宜しう御座ましたか、若長く続き、国民軍を募集する必要か起つたならば、我々の如き老人と雖も国家の為とあらば、決して出兵することを辞しませぬ。

此れか我国民の本性にして、神道の然らしむる所で有ります。彼旅順口にて、我兵の夥しく死にたるにも拘はらず、決して屈すること無きか如き、此れを証明するもので有ります。併し斯やうに申しますも、唯日本人は命を惜まず、多く死だと申す事を、誇る訳では有りませぬ。固より人間で有りますから、誰か一命を愛まぬ者か有りませう。其愛き一命をも抛ち、我身に替て国運を全らし、皇室国家に誠忠を尽して、神の定めし道を履行し、人たるの自分を尽すことを誤らざる国民で有る事実を、申し述べしに過ませぬ。曾て御聞に成しとの事で有りました、日本の武士道と申すは、神道中の一部の名で有るとの意も、此れにて御解りに成たかと存じます。猶申すことは尽ませねど、神道大要の御話は、先此れで有りますと申したれば、此れを逐一通弁の人か訳して、夫人に申すやうで有りました。然るに、夫人は能く之れを聞採

られたものと見えまして、また通弁を以て申しますには、有難う御座いました、能く分りました。さうすると、

御話の中にも、神道の主要と思はれますは、祭政一致と申すか、第一の要点と承はりました。日本の皇室御話のやうなる訳で有りますれば、私は他の国の者で有りますれど、実に多大の尊敬を払はねばなりません。就ては貴国の為には、何所までも、此祭政一致の制を、完全に維持せらるゝか、第一の事で有らうと考へられますと申しますから、私はまた之れに対して、祭政一致と申すを以て、神道の要点と御聞取に成りしは、私に於て御話致した甲斐か有りて、本懐の至りに存じます。夫に就て私は亦、貴国の政教一致の制を用ひられあるに、常に感服して居りました。其訳は元來貴国は旧教の御国で有りましたか、以利沙伯女王の時、新教を用ひて国教と為さむとせられました。時に貴国内に、旧新両教の戦争始まりて、内乱の起りたるを見て、西班牙は旧教の国でありますより奇貨措べからずと為し、無敵艦隊と称する水軍を率ゐ、海に一戦陸に一戦せば、英国は我版図に入るべし

と揚言し、大挙して、攻来りしに、貴国にては、我等今宗教の爲め、兄弟牆かきに鬩せぬぎて居るべきの時にあらずと、忽ち和睦し、全国挙て大いに達迷斯河口に逆ひかへ戦ひ、遂に班軍イスマニヤンを敗北せしめ、猶加勒斯港カレスまで追撃して敵艦五十余艘を焚き、貴国の大勝利に成ました。此れか好機と成て、女王の御趣旨か行はれて、新教を以て国教とせられましたか、此時より女王は英国の国王にして、教王をも兼られ、遂に政教一致の国とせられました。此の政教一致と申すか、即ち我国の祭政一致と、其旨を同うする所にして、全く道理に適ひたる制なるを以て、其後貴国は漸々世界に大勢力を得られて、現今貴国の版図内には、日の没することか無きと申すまでに至りたるは、全く此の政教一致の制の、宜しきを得られしに因るもので有うと、実に感服に堪えませぬと申したれば、夫人は定て同感で有うと思ひの外に、之れを聞て暫く沈黙して何とも言はれぬより、私も一時何故で有うと、甚だ不審に思ひました。然るに数分間経て、夫人徐ろおもむに言はるゝには、我国の政教一致は、惜い哉既に破れまして、近年政教分

離の論、追々に勢力を得て、最早到底之れを防ぐの術無きに至りました。未だ世間に表発へふたは致さず居りますれど、孰れ遠からず事実に、呈あはるゝ事有りませう。若し之れか事実に呈はるゝやうに成ますれば、踵つひて来るべきは、仏国の覆轍を踐むの懼れで有りますと云ひて、悲歎に堪たざるものゝ如く見えました。私も余りに意外の事を聞きましたから、さう成て居りますかと申したばかりにて、暫く話か切れまして、夫より余談に移りました。而してまた夫人は、更に端を改めて云はれますには、私は先年波斯ペルシヤに往て、品々いろいろ取調べましたか、同国には貴国と実に能く相似た事か、甚だ多いと申す事にて、種々の話か有りました。其末に夫人はまた私か斯やうに遠き国々へ参りて、種々に取調べを致しますは、実は一の大きいな希望か有ります。夫は別の事でも有りませぬ。世界の大平和を得るやうに致したいと申すか、即ち私か唯一の希望で有ります。然るに其世界の大平和と申すものは、世界に君主か二人有りては、眞の平和は得られませぬ。何故かと申さば、其君主と君主か互ひに約束を守る間

は、仮の平和か装はれて居りますけれど、人の結びた約束は利害の關係より、何時破るゝかも知れませぬ。其約束の破れたる時は、人民忽ち塗炭の苦みを受けるを免かれませぬ。其雙方の君主が大きく在たならば、大きい程人民の苦痛を感じることも、亦大きい訳であります。況てや今のやうに、世界に君主が多く有りては、到底眞の平和を得べきやうか有りませぬ。然れども世の進みゆく結果は必ず眞の大平和を得らるゝ時か、来るに違ひ有りませぬ。其時には必ず世界を統一する、眞の君主か出るに違ひ有りませぬか、其君主は多分、東洋より出らるゝで有うと思ひますと言ひました。ソコデ、私も夫は至極尤なる御説と思ひます。固より其世界の統一者たる君主は、何処より出るか、夫は今より明言は出来ませぬ、早晩世界統一の世の来るべきは、毫も疑ひの無き所で有ると申して、夫人の説と同意の事を申し置ました。是に於て私通弁の人に向ひ、此れは貴所に御尋申しますか夫人は世界統一の君主は、多分東洋より出るで有うと言はれたか、彼は夫人か我等東洋人に向ひての、挨拶の辭で有り

ませうと申しましたれば、通弁は真面目に成て、否へ彼は決して挨拶では有りませぬ。夫人は全く其考にて居ると見えて、我々にも始終右様の話をして居りますと申しました。して見ると彼夫人は眞実今申せる如く、思ふて居ると見えます。然るに其日は時刻が移りましたから、以上の話に止めて別れましたが、兎に角に外国人か、我國の道の研究に来るやうに成たと申すことは、我國に取りて大に賀すべき事と思はれます。且私の答へましたことに就ても、或は御意見か有られますかも知れませぬ、また夫人の云ひし事に就ては、世界今日の大勢の上に対し、或は御参考の一端と成るかも知れませぬと考へました故、纏々御話を申上りました。余りに長く成ましたから、先此辺にて御話を結ぶことに致しませう。

完

(明治四十一年九月廿九日於華族會館)